

歩く県道とは

福島県では、車の通行が不能となっている県道会津若松三島線、県道小林会津宮下停車上線（会津銀山街道の吉尾峠）を歩く県道として、整備・利活用し、地域の活性化につなげるための取り組みを行っています。今年度も道普請を実施して街道の整備を行うとともに検討会を開催し、峠道を活用した地域づくり活動について、地域の皆様と話し合いを行いました。

「普請」（結ともいふ）は、町村や地区全体にとってプラスになることをみんなの力を合わせて行うことです。今日でも青年団の「むら仕事」や町内会の「側溝の清掃」などが行われています。私たちが取り組む道普請は、人が歩き、馬や牛が行き交っていた時代の主要街道（会津銀山街道と旧越後街道）の峠道を対象として、自然に寄り添った工法「近自然工法」で整備を行っています。



整備前



整備後



- 1: コゴミ沢に設置した丸太橋。歩きやすいように、割った丸太を渡しました。
- 2: 丸太橋の杭打ちをしている様子。現地で採取した丸太を打ち込む際は、木の中心をとらえるのがコツ！
- 3: 沢の護岸の様子。両岸は丸太を積み上げ、河床部には線路のように丸太を並べて、流速を抑えます。
- 4: コゴミ沢前後の横断側溝を丸太で補強のしました。歩きやすいように小さい橋を渡したり、側溝の出口に丸太を敷き、洗堀を防止する工夫を行いました。

丸太橋には、ほどよい曲がり具合の木を利用して手すりもつけました。参加した皆さんと「格が上がった！」と喜び合いました。豪雪地帯特有の樹形「根曲がり」を活かした手すりは、街道の文化や歴史を伝えるきっかけとして、吉尾峠の新たな魅力となりました。

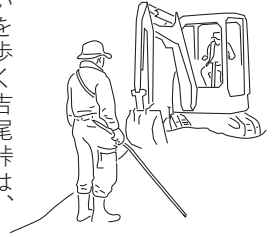
今年度の道普請は、コゴミ沢へ丸太橋を架ける作業を行い、35名の参加をいただきました。作業は、木を切り出して資材を調達することからはじまり、橋の架設と沢の護岸を合わせて行うことでより安全に歩ける道に整備しました。またコゴミ沢の前後にバックホウで掘った横断側溝の補強作業も行いました。

吉尾峠は、沢歩きが楽しめる道です。小さな沢がいくつもあり、地元から道を横断する沢への架橋やぬかるみ改善をしたいと要望をいただいております。

コゴミ沢に丸太橋を架ける



小型バックホウで排水性を高める



小さな沢が集まる布沢川沿いを歩く吉尾峠は、ぬかるみやすく、早期の解消が地元より求められてきました。そのため、小型バックホーを用いた対策を行っています。

今年度は全体の半分の区間（鎌倉沢～吉尾集落跡間）の路面補修と排水対策に取り組み、山側素掘り側溝や横断側溝、路面整正等の作業を行い、排水性を高めました。



- 1: 整備前の吉尾集落墓地工区の様子。
- 2: 整備後の吉尾集落墓地工区の様子。山側に素掘り側溝を掘り排水性を高めた。
- 3: 小型バックホウでの作業の様子。



刈屋晃吉さんと吉尾峠

吉尾峠の思い出や今後の利活用への思いを、麓に住む、刈屋晃吉さんに伺いました。



- 1: 吉尾集落の家並み。
- 2: 峠の頂上にて、吉尾集落の子供たち。
(只見町川と人の物語 より)

吉尾集落の春の**大般若会**や秋祭りには、峠を越えて昭和村や金山町から帰省客や背負い商いが露店を並べ華やいだものです。日常的には、「いっぱい獲れる豆の種を貰って来た」「折衷苗代は初めてだから手伝ってほしい」「養蚕をやめたから蚕具を貰って来た」など、只見町と昭和村での交流が昭和30年代前半までありました。

奥会津は、河川沿い道路と峠越え道路で近隣の町や村を縦横に結んで発展してきましたが、只見川電源開発や車の普及を機に峠路の整備が取り残されました。今日の過疎化、限界化、消滅化が心配される背景には、峠を越えて町や村を結ぶ道路整備とそこを介した住民の連携協働を軽視し、多くの袋小路の地域や集落をつくったことが大きいと感じます。

『歩く県道』道普請が、峠路をしっかり位置づけた道路整備の重要性が認識されるキッカケになって欲しいと切に願ってやみません。

会津銀山街道の魅力 「吉尾峠 山の神」

吉尾峠の頂上には、「山の神」があります。社の前には小さな広場があり、そこで地元の刈屋さんから嫁入り行列の思い出を伺いました。「峠を挟んだ隣集落との婚姻では、「花嫁の受け取り渡し」や嫁入りの道具を担いだ行列が峠を越えていった。農繁期が過ぎた晩秋の11月や残雪の3月～4月に多かった。」白銀の世界を歩く情景を浮かべ、当時に思いを馳せました。



ご意見・お問い合わせ

福島県南会津建設事務所 企画調査課

TEL : 0241-62-5322 / FAX : 0241-62-5274

